

## 令和7年度 釧路湿原エゾシカ対策検討会議 議事録

※ 議事概要の記述において、発言者の所属・敬称・肩書は省略して記載した。

### 議事 1. 令和7年度エゾシカ対策事業の結果報告について

- ・資料 1 釧路湿原生態系維持回復事業実施計画（第2期）の事業整理表
- ・資料 2 令和7年度エゾシカ捕獲対策の実施状況（捕獲試験、捕獲対策）
- ・資料 3 隣接地域におけるエゾシカ捕獲数
- ・資料 4 令和7年度指定管理鳥獣捕獲等事業におけるエゾシカ捕獲結果
- ・資料 5 令和7年度エゾシカの生息状況モニタリングの実施結果
- ・資料 6 令和7年度植生モニタリングの実施結果
- ・資料 7 エゾシカ捕獲状況と植生影響状況の統合図
- ・資料 8 広域的な影響把握調査手法の検討
- ・当日配布資料 令和7年度エゾシカ航空カウント調査業務実施結果（速報版）

発言者	内容
環境省 鈴木	令和7年度釧路湿原エゾシカ対策検討会議を開催する。 会議開催にあたり、検討会議の事務局を代表して釧路自然環境事務所所長の岡野よりご挨拶申し上げる。
環境省 岡野	委員並びに関係行政機関の皆様におかれましては、ご多忙のところご参加いただき御礼申し上げます。本会議は、釧路湿原国立公園及びその隣接地域におけるエゾシカ対策、モニタリングについて科学的な助言をいただくこと及び関係機関での情報共有を目的とし、平成23年度より開催させていただいている。 釧路湿原のエゾシカは過去の調査により約7割が通年湿原内を利用している状態であることから、湿原内での捕獲に取り組んでいる。 本日一つ目の議事では、釧路湿原生態系維持回復事業の第2期実施計画に基づき実施したエゾシカの捕獲対策、モニタリング等の結果についてご報告したい。詳細は後ほど説明させていただくが、今年度は2月11日時点で128頭の捕獲が出来ている。これは、委員並びに関係機関の皆様のご協力の賜物である。 釧路湿原生態系維持回復事業第2期実施計画は来年度に終了する。二つ目の議事では、それに伴う改定の見通しや課題認識について共有したい。 忌憚のないご意見を頂戴したく、何卒よろしくお願い申し上げます。
環境省 鈴木	委員のご出席状況は、6名の委員が出席であり、中村委員におかれてはオンラインで遅れてご出席の予定である。関係機関においては、鶴居村及び標茶町がオンラインでのご出席である。 資料は1から9までの9種類。参考資料は1から4までの4種類、当日配布資料が1種類となっている。 会議は公開での開催となる。会議資料と議事録については後日、釧路自然環境事務所のホームページに掲載する。傍聴にて参加の方は会議での発言はご遠慮頂きたい。 ここからの議事進行は稲富座長にお願いしたい。

発言者	内容
稲富座長	最初の議事「令和7年度エゾシカ対策事業の結果報告について」について、まず資料1 釧路湿原生態系維持回復事業実施計画（第2期）の事業整理表の説明を願う。
環境省 菊池	資料1 釧路湿原生態系維持回復事業実施計画（第2期）の事業整理表 説明
EnVision 中村	資料2 令和7年度エゾシカ捕獲対策の実施状況（捕獲試験、捕獲対策） 説明
稲富座長	<p>今年度実現した捕獲目標の達成は周辺のエゾシカが増加したこともあるが、これまでの努力の成果の1つであると考えます。</p> <p>続いて関係機関より隣接地域における捕獲状況について報告を願う。また、先ほどの報告でも課題として挙げられていた、野犬の出没状況についても情報があれば共有いただきたい。</p>
釧路市 石崎	<p>令和7年4月1日から10月31日までの期間におけるエゾシカの捕獲頭数は、オスが1608頭、メスが2078頭の合計3686頭である。</p> <p>野犬については、令和7年度の秋ごろに釧路大規模運動公園周辺で野犬の目撃情報が寄せられ、2頭を捕獲している。また、新釧路川右岸堤防において、シカ捕獲を行っている環境省より野犬2～3頭の目撃情報が寄せられ、本市担当職員も確認している。たため、目撃情報については、関係者との共有を図っていると同時に、担当職員による定期的なパトロールを実施している。</p>
釧路町 品川	<p>令和7年4月から10月末までの期間におけるエゾシカの捕獲頭数は、釧路町全体で1857頭である。その内、湿原に隣接する区域についてはオスが180頭、メスが95頭の合計275頭であり、全体の14%となっている。最も捕獲しているメッシュ番号ソ433では196頭を捕獲しており、前年より40頭増加した。増加した要因は捕獲従事者の自発的な努力によるものであると考えます。</p> <p>捕獲従事者からの意見として、湿原は平坦なためバックストップが少なく、ソーラーパネルがあり撃てない場所がある、湿地帯では撃ったエゾシカの回収が困難なため撃つのを躊躇う、といった意見が挙げられている。</p>
標茶町 松江	<p>令和7年4月1日から9月末までの期間におけるエゾシカの捕獲頭数は、オスが1278頭、メスが1412頭の合計2690頭である。</p> <p>野犬については例年何頭か捕獲しており、今年度の捕獲数は8頭になっている。2026年の1月にも虹別地区にて3頭の野犬の目撃があり、その内の1頭は捕獲している。</p>
鶴居村 奥山	<p>令和7年4月1日から令和8年1月末までの期間におけるエゾシカの捕獲頭数は、オスが1164頭、メスが1244頭の合計2408頭である。</p> <p>野犬については環境省より住民課に目撃情報が寄せられたため、2月24日から3月末ごろまで箱罠による捕獲を実施する。</p>

発言者	内容
根釧西部森林管理署 後藤	根釧西部森林管理署では国有林内にてエゾシカの捕獲を実施している。厚岸地区、標茶地区、弟子屈地区の3地区で大型囲い罠を設置している。2月16日時点では厚岸地区で12頭、標茶地区で9頭となっている。 国有林における野犬についての目撃情報は寄せられていない。
釧路総合振興局 渡邊	資料4 令和7年度指定管理鳥獣捕獲等事業におけるエゾシカ捕獲結果 説明
稲富座長	釧路湿原内及び隣接地域の捕獲対策の報告をいただいた。これまでの報告について意見はあるか。
高嶋委員	資料2のGPS首輪装着個体が死亡した可能性があるとのことだが、GPSによる追跡情報から具体的な死亡場所の特定が出来るのではないか。
EnVision 中村	このGPS首輪装着個体は約10年前の推進費事業(2014年~2016年)で装着した個体である。現在はGPS首輪の電池が切れており追跡は出来ない。
高嶋委員	温根内の木道沿いで月に1度植物の定点観察をしている。今年度はガマの穂がすべてなくなっており、原因がわからなかったが、資料2の報告で囲い罠が倒壊するほどの強風があったと聞いて納得した。 大型囲い罠において強風の影響を緩和するために一部の幕を外しているとのことだが、これは捕獲の際には担当者がずっと罠に張り付いて対応しているのか。
EnVision 中村	風速が20mを超えるような日は警報が出ているため、捕獲作業は中止している。また強風の際はエゾシカも動かない傾向があるため、可能な限り風の弱い日に捕獲を実施している。
高嶋委員	大型囲い罠が倒壊するほどの風は他の地域でも起こり得るのか。
EnVision 中村	捕獲を実施している右岸堤防は地形的に吹きさらしになっており特に風の影響を受ける場所である。堤防の下や林内にて囲い罠を設置した際はここまでの倒壊は起きていないため立地による要因と考えられる。 他の地域においても、風の影響を受けやすい場所では幕を外す等の対応が必要になると考える。
稲富座長	囲い罠はどうしても風の影響を受けやすい。風が非常に強い場所に囲い罠を設置する際は幕を張らずに、風を通す構造にしている留萌管内の事例もある。
小林委員	資料2の野犬について、シカを襲った野犬は1頭なのか。また、希少動物に配慮したくくり罠とのことだが、これはくくり罠自体が最新式のものなのか、くくり罠は従来のものであり、運用方法で配慮しているのかどちらか。最後に麻醉銃による駆除についてだが、一昔前の麻醉銃では放物線を描き弾が飛ぶためプロのハンターでも狙うのが難しかったと聞く。今の麻醉銃は性能が向上しているのか、有効射程距離はどの程度なのか。

発言者	内容
EnVision 中村	<p>野犬については、目視で確認しているのは2頭から3頭であり、自動撮影カメラでも同様の頭数が確認されている。</p> <p>くくり罠については従来のくくり罠の中で作動重量を調整できるものを使用している。運用方法として場所の選定、タンチョウの利用状況調査、自動撮影カメラによるモニタリングという3つの手法を用いて配慮している。</p> <p>麻酔銃については10年ほど前に発売されたものであり、ライフリングを切っているため従来の物よりは真っ直ぐに飛ぶ。射程距離は20mから30mほどである。狙うのは難しく、練習が必要ではあるが、右岸堤防のエゾシカは距離が近いので十分に狙うことが可能である。</p>
小林委員	<p>タンチョウの場合はエゾシカとの体重による識別は可能であるが、タンチョウのジャンプ等の局所的な衝撃の際に罠が作動しないか気になる。また、今後はタヌキやキツネといった他の動物との混獲についても検討していく必要があると考える。</p>
金子委員	<p>資料2の捕獲数の推移について、堤防の牧草に誘引されている状況や早い時期からの捕獲開始が効いているとのことだが、これまでの年の積雪量の増減や牧草の生育状況等条件の違いはどの程度あるのか。</p>
EnVision 中村	<p>今年度の積雪量に関しては例年よりも少ない印象を受ける。積雪量が多かった令和元年度や令和2年度に比べると積雪深が40cmほど低い。積雪や気温についても捕獲状況に効いていると考えるが比較検討までは出来ていない。</p>
金子委員	<p>積雪の少ない場所の罠だと多く捕獲できるといった傾向はあるのか。</p>
EnVision 中村	<p>赤沼地区においては積雪深が増えるとエゾシカの利用が減る傾向にある。</p>
稲富座長	<p>積雪による影響は様々あると考えている。例えば積雪が増えることにより給餌の誘引力が強くなることが考えられる。一方で、赤沼地区のように降雪後にはエゾシカが別の場所に行ってしまう捕獲出来なくなる場合もある。一概に積雪が多いと捕獲効率が上がる、少ないと上がるということとは言えないが、今後の捕獲適地の選定において重要な検討要素である。</p> <p>くくり罠について、捕獲効率が約50%と非常に高い。一般的に5%ほどで効率が良いとされる中で10倍の効率である。是非継続してもらいたい。</p> <p>今後、囲い罠や麻酔銃についても継続して検討していくと思うが、どの手法においても課題になってくるのが捕獲したエゾシカを受け入れる処分場の制限等による出口問題である。出席者の方で新しい出口候補をご存じないか。</p>

発言者	内容
釧路総合振興局 渡邊	<p>来年度に厚岸町での捕獲事業を検討しているが、厚岸町のゴミ処理場はエゾシカを受け入れていないため、資料 2 に記載されている釧路広域連合清掃工場に搬入する予定である。</p> <p>厚岸町の業者が実施する捕獲事業では斜里町の(株)知床エゾシカファームに持ち込んでいると聞いている。</p> <p>その他には北泉開発(株)の養鹿場に持っていくこともあるが、それ以外の方法については目途が立っていない状態である。</p>
稲富座長	<p>北泉開発(株)については、生体捕獲であれば受け入れるがくくり罠で捕獲したエゾシカは受け入れていないと聞いている。やはり出口問題は釧路管内において大きな問題であるということが浮き彫りになったのではないかと。</p> <p>続いて資料 5 令和 7 年度エゾシカの生息状況モニタリングの実施結果について説明願う。</p>
EnVision 小林	資料 5 令和 7 年度エゾシカの生息状況モニタリングの実施結果 説明
稲富座長	続いて当日配布資料の令和 7 年度エゾシカ航空カウント調査業務実施結果（速報版）について説明願う。
EnVision 小林	当日配布資料 令和 7 年度エゾシカ航空カウント調査業務実施結果（速報版） 説明
稲富座長	当日配布資料の表 2 の U8 について、令和 2 年度から令和 7 年度にかけて推定頭数は増加しているが、密度は減少している。この理由は何か。
EnVision 小林	U8 は 8-1 と 8-2 に分かれており、令和 2 年度はどちらもモニタリングしているが今年度は 8-1 のみでモニタリングをしている。
稲富座長	面積の違いにより推定頭数と推定密度にズレが生じるとのことで理解した。

発言者	内容
石名坂委員	<p>航空カウント調査の見落とし率の算出方法について、強度調査では見落としが無いという前提で算出している。過去に知床半島エゾシカ管理計画での航空カウント調査にて見落とし率の算出を試みた際は、狭い範囲での追い出しカウントを実施した。釧路湿原においてもアクセスが容易な場所で大人数での追い出しカウントを実施してはどうか。ただし、この調査は航空カウント調査と近い時期に実施することが理想である。</p> <p>U15 の宮島岬周辺について、個体数が増加しているが、ここは捕獲が困難なため植生保護を優先して行う地域（対策地区区分 B 地区）になっている。既存の捕獲実施地点に隣接する場所でエゾシカが増え続けていくと次から次へと侵入してくる状況になってしまい、捕獲効率が低下した際のリバウンドの原因になりかねない。そのため、捕獲が困難とは言え、宮島岬やキラコタン岬のエゾシカを完全に放置をすることは危険ではないか。例えば試験的に巻狩を実施する等エゾシカを攪乱する必要があるのではないか。人間の力で攪乱が難しい場合は発信機を装着した猟犬を活用してはどうか。</p> <p>資料 5 の 5 ページにて、罠圏内個体数の 30% の捕獲の維持が必要とあるが、捕獲戦略や手法検討について具体的な例はあるのか。</p>
EnVision 小林	<p>捕獲効率の維持のために今年度から意識していることとして、捕獲作業や罠の修繕作業等で捕獲場に立ち寄る際は必ず給餌をするようにしている。これにより、擦れジカ発生の抑制を試みた。効果として様々な要因が複合してではあるが、今年度は捕獲直後でもエゾシカが集まってくる状態を作れている。</p> <p>もう一つが、今回は罠のゲートを 2 つにしたことで、より囲い罠の中が見える状況になり警戒心を弱めることができていると考えている。</p> <p>今後は給餌物の内容についても検討していければと考えている。</p>
稲富座長	<p>資料 3 を改めて見ると、宮島岬やキラコタン岬の各メッシュ内では一定頭数が捕獲されている。同じメッシュ内でもおそらく湿原部分では捕獲されていないため、周辺の捕獲状況についてももう少し細かく分析する必要があるのではないか。</p>
金子委員	<p>資料 5 について、右岸堤防にエゾシカが集まっているが、湿原部分より法面の雪解けが早いことや、牧草が生えているといった誘引されている要因はあるのか。</p>
EnVision 小林	<p>雪解けが早いことも牧草が生えていることもどちらも誘引の要因になっていると考えている。周りの湿原植生よりも法面の牧草の栄養価が高くなるのが 10 月から 12 月頃であり、草が枯れ雪を被るまでの間は栄養価が高い場所が法面だけしかなくなることで右岸堤防に集まっているのではないか。</p>
金子委員	<p>法面の牧草や積雪の影響がエゾシカ個体数の維持に関わっている部分もあるのではないか。</p>

発言者	内容
EnVision 小林	<p>栄養価の高い餌を利用することでエゾシカの増加率が上がり個体数維持に寄与している可能性はあるが、一方で右岸堤防の法面に誘引されることにより、降雪前の秋捕獲が実現出来ている。</p> <p>右岸堤防を利用しているエゾシカがどこから来ているのかを把握することも重要であると考えている。推進費事業（2014年～2016年）の際にGPS首輪を装着して追跡しているが、気候変動や積雪深の変化によりエゾシカの行動にも変化が起きている可能性がある。そのため、改めてGPS首輪による追跡を実施することが望ましい。</p>
金子委員	<p>右岸堤防のエゾシカ個体が国立公園の外側から侵入しているのかどうかは非常に重要である。可能であればGPS首輪による追跡調査をすることが望ましい。</p> <p>航空機センサスの結果について、令和2年度からの変化量を算出しているが、2回分の調査結果を重ねただけでは解釈が難しい。エゾシカの密度が減少した場所、増加した場所についてドローンを用いてきめ細かくモニタリングをすることで傾向をつかめるのではないかと。</p>
EnVision 小林	<p>航空機センサスは空間的なスケールとして広く見ることが出来るが、時間的なスケールでは点でしか見ることが出来ない。そこを補うためにドローンによるモニタリングを今後検討していく必要がある。</p> <p>説明や資料は準備していなかったが、今年度はU13、U18、U19の3つのユニットにて熱赤外線カメラを搭載したドローンを用いた補強調査を試行している。結果については現在集計中である。</p>
金子委員	<p>ドローンを用いることで植生についても情報を収集することが出来る。冬期だけではなく夏期や秋期、朝方や夕方に撮るといった複数の時間軸で撮影することで季節的な違いや植生の情報についても収集出来るのではないかと。</p>
稲富座長	<p>航空機センサスは費用が高額であるため新しい手法の検討は今後必要である。また、GPS首輪による追跡調査についても意見があったが、コストの問題もあるため何を優先していくのかを検討することが重要である。</p>
高嶋委員	<p>ヘリコプターを使用した航空機センサスとGPSによる追跡調査の費用はどの程度か。</p>
金子委員	<p>ドローンについては機体の価格の低下及び飛行時間の向上が進んでいる。そのため、数年前の数分の1程度の費用に抑えられるのではないかと。</p>
稲富座長	<p>ドローンについては技術的にかなり進歩している印象を受ける。</p> <p>続いて植生モニタリングの結果について。資料6及び資料7の説明を願う。</p>
環境コンサル タント 佐藤	<p>資料6 令和7年度植生モニタリングの実施結果 説明</p> <p>資料7 エゾシカ捕獲状況と植生影響状況の統合図 説明</p>
稲富座長	<p>続いて資料8について説明願う。</p>
EnVision 小林	<p>資料8 広域的な影響把握調査手法の検討 説明</p>

発言者	内容
中村委員	<p>影響が低減するまで捕獲によって湿原全体のエゾシカの個体数を管理するのは大変厳しいため、まず植生への影響を最小化させることが第一の目標になるのではないかと。</p> <p>資料 7 の統合図について、エゾシカの生息密度と植生の関係についてもう少し見えてくると、今の植生をどのように保全していくのかといった戦略が見えるのではないかと。</p> <p>植生モニタリングの結果ではササの影響もあって変化が見えなかったとのことだが、植生がエゾシカから受けている影響を把握するための新たな調査手法の検討が必要なのではないかと。</p>
環境コンサルタント 佐藤	<p>広葉樹林はササの影響によりなかなか評価が難しいと考えている。ササが繁茂することで他の種の侵入も生長も難しい環境である。現状はシカ排除柵内外の比較をしているが、今後はエゾシカが増える前のデータ等との比較をすることで見えてくるものもあるのではないかと考えている。</p>
稲富座長	<p>エゾシカの捕獲による効果が今後植生にどのように効いてくるのかが重要になる。</p> <p>資料 7 では全ての地区で影響が強く、植生が衰退もしくは横ばいの傾向が示されている。これが回復傾向になるような施策がとれると良いのではないかと。</p>
石名坂委員	<p>知床半島エゾシカ管理計画でのモニタリングにおいても、エゾシカの個体数調整による植生の回復傾向の評価をササが攪乱する事例があった。今後、植生を評価していくうえで、シカ排除柵の内外だけでなく、シカ排除柵内外にササを排除した区画を設けてみてはどうか。</p>
稲富座長	<p>ササに被覆されることで回復しない植生もあるため、ササの刈り取りを含めた調査は意義があるものとする。しかし、この調査はエゾシカの生息密度を一度減らした後のステップであると考えられる。</p>
高嶋委員	<p>釧路湿原周辺のササはミヤコザサ・オオクマザサ（センダイザサ）という地上部は一年生のササである。ミヤコザサの葉鞘は無毛、肩毛はやや発達が悪く、オオクマザサ（センダイザサ）は葉鞘は有毛で肩毛はよく発達する。葉の裏はどちらも軟毛を密生する。後者はかつてエゾミヤコザサなどとも呼ばれていた。どちらも春に芽が出て冬には茎（稈）は倒伏し、翌春には葉はほぼ枯れ（痛む）て入れ替わる一年生。ただし、地下部の根茎は生きているため、地上部が一年生と注意しておく必要がある。一方、地上部の茎（稈）の節に冬芽をつけ、翌年そこが新たに成長して脇芽が伸びて数年生き続けるクマイザサ、チシマザサなどと違いがあることを意識しておく必要がある。ササの刈り採り区を作って比較することは有効ではないかと。</p> <p>資料 8 のシカ道の評価について、シカ道はエゾシカがどれだけその場所を利用しているかという証明であり、周辺の植生への採食ともリンクしてくると考えられる。しかし、草丈の低い植生では問題がないが、イワノガリヤス群落のようなシカ道の評価が難しい植生もある。</p>

発言者	内容
稲富座長	<p>植生タイプによってはシカ道による評価が出来るのか検討が必要である。</p> <p>資料 6 の植生指標種による評価について、これはなかなか難しいという報告であった。次の実施計画において継続するかは検討が必要である。私の意見として、植生指標種自体は柵を置いた直後に反応を示した種を抽出しているため、固執する必要はないと考えている。新たなモニタリング手法が提案されている中で、優先順位を決めていく必要があり、その中で植生指標種によるモニタリングは優先順位が低い印象である。</p>
金子委員	<p>ドローンはA I の技術もあり技術的に大きく発展している。解像度も数cm単位で高さのデータを取ることが出来るためシカ道の有無だけではなく、シカ道の周辺の植生がどのように変化したかについてもモニタリングすることが出来る。こういった技術も組み合わせてモニタリングしてはどうか。</p>
稲富座長	<p>ドローンの発展は非常に目覚ましく、(樹冠などの遮蔽物がない) 湿原との相性もいいと考えられる。そういった観点からも検討頂きたい。</p> <p>続いて次の議事に移る。</p>

## 議事 2. 令和 8 年度エゾシカ対策事業について

### ・資料 9 令和 8 年度エゾシカ対策事業（案）

発言者	内容
環境省 菊池	資料 9 令和 8 年度エゾシカ対策事業（案） 説明
小林委員	<p>本事業では「ラムサール条約登録以前の状態への回復を目指す」という目標を設定している。ここで問題になるのが、ラムサール条約登録に係る基準の遵守についてである。釧路湿原は 3 つの登録基準を満たしてラムサール条約に登録されているが、ラムサール事務局に登録している釧路湿原の情報（ラムサール条約湿地情報票、以下「RIS」）は 1999 年で更新が止まっている。自然再生事業の実施やエゾシカの増加に関する記載もない。</p> <p>この会議が直接かかわっているわけではないが、目標を達成するにはラムサール条約に係る視点についても必要になるのではないかと。また、当時作成された RIS の中にはタンチョウやトンボ類、キタサンショウウオのデータがまとめられている。現在はエゾシカによる影響は植生以外のこれらの生物にも及んでいる可能性があるため、様々な専門家から意見を集約してはどうか。</p> <p>エゾシカの影響を 0 にすることは出来ないが、エゾシカによる影響を最大限減らす努力をしているということをラムサール条約を通じて海外に発信していくことは重要ではないか。</p>
環境省 鈴木	<p>ラムサール条約関係については省内でも確認をしたい。</p> <p>生態系の視点についてはおっしゃる通りであり、植生に係る目標の設定で苦労している事例が道内でも多いと認識している。例えば知床半島エゾシカ管理計画でのモニタリングにおいても、シカ対策への植生の応答は不明瞭だが、昆虫や野鳥調査の結果はシカ対策の実施状況に対応しているのだといった結果だったと記憶している。他地域の事例も考慮して検討を進めたい。</p>
高嶋委員	<p>捕獲数を増加させることも大事だが、廃棄処分の方法をどうするのかについて検討を進めていく必要があるのではないかと。</p>
稲富座長	<p>残滓の出口問題については避けては通れない問題である。引き続きご検討いただきたい。</p> <p>来年度は 2 回会議を開催予定のため、その中で詰めていければと考えている。もし、会議開催前にでも論点について意見等があれば事務局までご連絡頂きたい。</p>
環境省 鈴木	<p>令和 7 年度の釧路湿原エゾシカ対策検討会議を以上で終了する。</p>